

《祝祭の広場》 ひもろぎ空間を現代の都市空間に重ね合わせる

建設コンサルタントサニー・ヒュマス・ヨコモジ マコト建築設計事務所・都市企画工房共同提案体

01 | 計画の背景

1964 年新産業都市に指定されて以来、工業都市として大きく発展した大分市では駅前にスーパーや百貨店などの集積もみられたが、市域の拡大に伴うドーナツ化現象による中心市街地の空洞化は他の地方都市同様に避けがたく、計画地においても若者向け大型ファッションビルが 2011 年に撤退した。その後、再開発も進まず時間貸し駐車場であったところを 2017 年大分市が取得し、2 年後のラグビー W 杯大会の開催に合わせて「祝祭の広場」として整備することになった。2018 年 3 月、特別選考委員に磯崎新氏を迎え、設計プロポーザルが実施された。①大分駅北口の回遊性や滞留性を高め、まちの活性化に資すること。②大分を訪れる人々や市民にとって憩いの場となること。③多くの人々が集うお祭りやイベントなど祝祭の演出ができるまちなかの広場となること。以上の提案が求められた。

02 | 提案

プロポーザルにおけるわれわれの提案は、かつて日本中どこでも見られた社寺の境内の空間を参照し、象徴性と仮設性を主軸に据え、日常と非日常を行き来する《ひもろぎ空間》を現代都市に重ねるというコンセプトのもと、大分の戦後の発展を支えた臨海工業地帯に見られる自走式門型ガントリークレーンをデザインモチーフとした大小 2 基の架構体を広場に敷設されたレールの上に置き、プログラムに合わせて移動し位置を変える、常に変化し続ける公共の広場である。クレーンの存在、あるいはその移動によって生じる異化効果を中心市街地活性化の源にしようと考えた。

03 | 3 つのコンセプト — 設計プロポーザル時 —



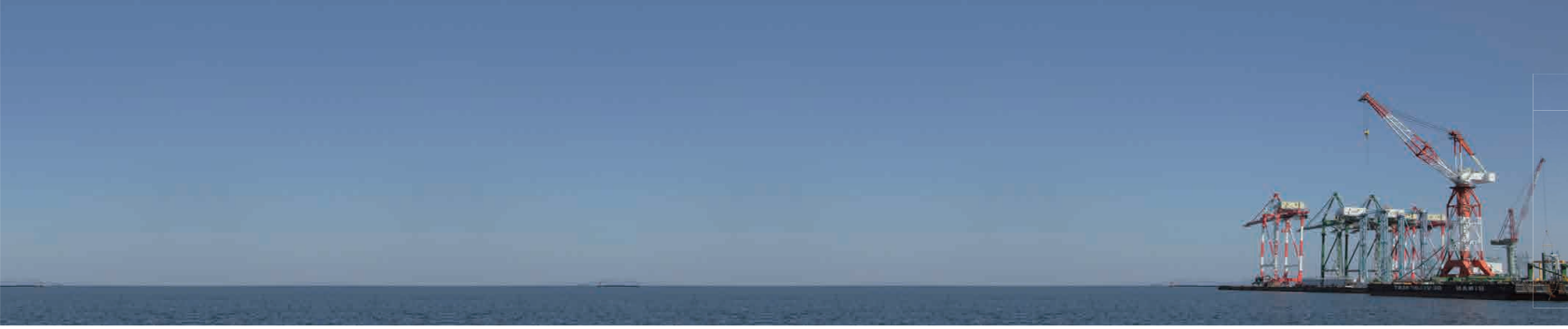
ムーブメント / movements

一つのムーブメントは、次のムーブメントを生み、そのムーブメントはまた、次の新しいムーブメントを導く。
「祝祭広場」には、強い仮設性を有し、あらゆるものの境界であらうとする。様々なイメージを引き受け、多様なアクティビティに応じる柔軟性を備え、人々を迎える。今日、かつてのような運命共同体は解体され、多様で複雑な関係性の中で人々は生きている。
「祝祭広場」を生み出すための装置自体も可動なものとす。それらが展開した先には、仮設的で一時的な場＝フィールドが発生する。その場もいつれ、次のムーブメントを導き出し、それそのものに取られていく。全ては、流れの中にある。



ひもろぎ / temporariness

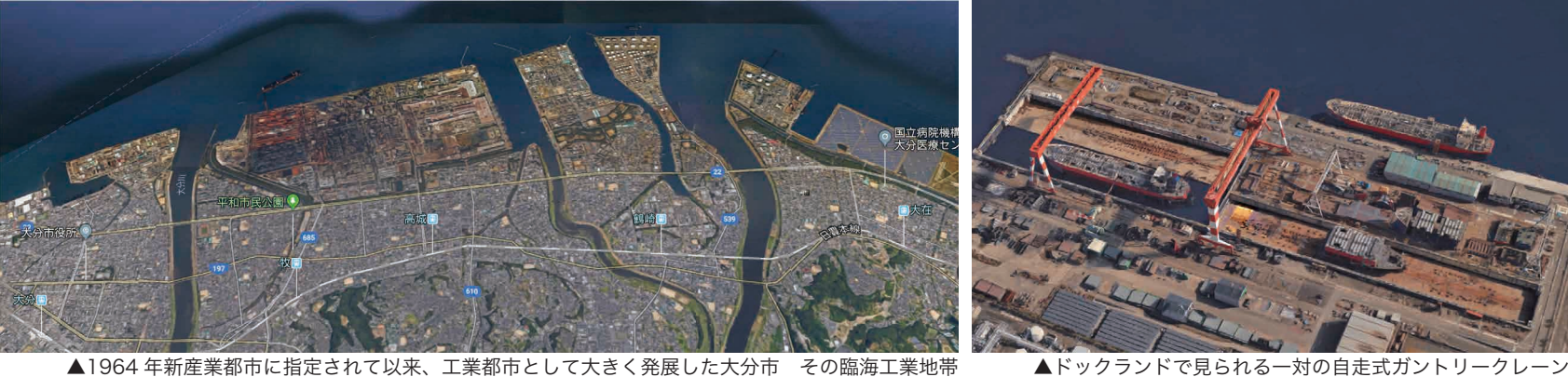
地面に四本の柱を立て、その頂部に注連縄を回すことで、そこは特別な場となる。
「祝祭広場」は、強い仮設性を有し、あらゆるものの境界であらうとする。様々なイメージを引き受け、多様なアクティビティに応じる柔軟性を備え、人々を迎える。今日、かつてのような運命共同体は解体され、多様で複雑な関係性の中で人々は生きている。
「祝祭広場」を生み出すための装置自体も可動なものとす。それらが展開した先には、仮設的で一時的な場＝フィールドが発生する。その場もいつれ、次のムーブメントを導き出し、それそのものに取られていく。全ては、流れの中にある。



境内 / precinct

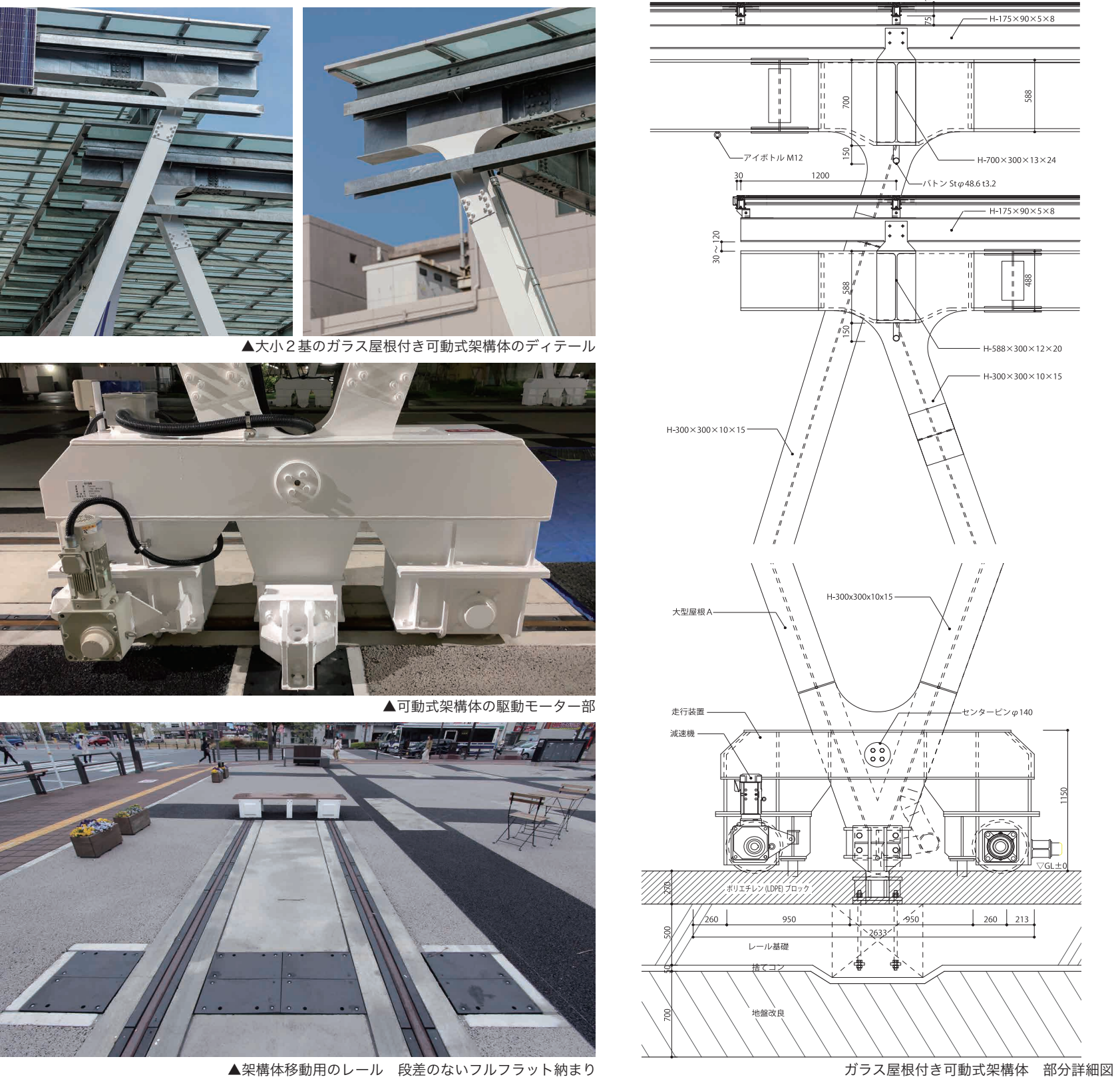
祭礼は《境内》で行われてきた。各地の神社で執り行われる縁日は、比呂尼や能役者など公界者により、人々が生きる歓びを共有し得る交歓の場であった。「祝祭広場」を現代都市の《境内》と捉える。そこは、あらゆるアクティビティを受け入れるための空無な空間とする。そして境界として、一対のガントリークレーンを据える。大分臨海工業地帯の搬送装置群が並ぶ光景を、「祝祭広場」に移すのだ。
《祝祭広場》に置かれた一対のガントリークレーンは、広場に《ムーブメント》をもたらす装置であり、まちに異化効果をもたらす客もしくは、遊行者である。

04 | デザインモチーフ



05 | 多様なプログラムを受け止める《祝祭の広場》とガラス屋根付き可動式架構体

大小 2 基の屋根付きの架構体は、長さ約 70m のレール上を自らが持つ太陽光発電パネルで得た電力で移動する。レール沿いには、イベント用電力（動力および電灯）や給排水に接続可能な埋設配管を備えている。日常的には市民の憩いの場として、大分市自主企画事業、地元商店会や民間企業などによる各種イベント会場として、広場で展開されるさまざまなプログラムに合わせて柔軟に会場構成が可能である。2019 年 9 月に竣工し、その翌月にはラグビー W 杯大会のパブリックビューイング会場として記憶に残る賑わいと興奮の場となった。



06 | 《祝祭の広場》の新しい日常

新型コロナの影響により《祝祭の広場》でも多くのイベントが中止された。以下、2020 年 3 月 26 日 12 時過ぎの様子である。

小雨の降る中、屋根の下は明るく雨にも濡れず、風通しは極めて良好。数名の若者が、設置されているいくつかの丸テーブルに 1 人づつお互いの距離を保ちながら座り、各々教科書やノートパソコンを広げている。半年前にこの場所で行われたラグビー W 杯大会の歡喜の渦を思い出せば、無に近い静けさとも言える。広場を横切っていた女性が、ベンチに座り弁当を広げはじめた。

われわれがめざしたのは、まちはずれの神社の境内のような空間である。大げさな表現かも知れないが、気ままに広場で時間を過ごす人々をみて、ケノハレ、日常/祝祭が同時に存在する空間、その一つのありようを眼の当たりにしたように思えた。

